

オンラインによる大学生へのピアノ指導の在り方

紙鍵盤と YouTube を活用してー

関西福祉大学 木原 加代子

はじめに

コロナ禍において、世界中が不安と混乱をきたしている。学校現場は、自宅学習になり、卒業式や入学式も行えないという、前代未聞の異例の事態となった。本学においても、対面授業の見通しさえつかないまま新年度を迎えた。新入生の4月当初の実態は、履修登録をする必要があるため、大学側から、最小限の担当者が履修指導をした。学生は時間差をつけ密にならない人数で、履修登録をして帰らせた。そのため、教職員の顔を見ることもなく、ZOOMを使ったオンラインで授業を実施することになった。

音楽技術(基礎)は、1回生の前期に、主としてピアノ指導をする講義である。受講する半数近くの学生が、アパート住まいであり、アパートでは楽器の音を出すことができない。また、通学している学生のほとんどがピアノを習った経験がないことから自宅に鍵盤楽器がない。大学のピアノの練習室も密室になるため、使用ができないという実態である。そこで、紙鍵盤と YouTube を活用して、初心者のピアノ指導の在り方を考える。

主題設定の理由

本学の教育学部は、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士の3免許を取得することができる。採用試験で、ピアノの実技が必要となるため、初めてピアノを習う学生が多い。大学に来て、初めてピアノを習う学生は、階名が読めない。鍵盤上でドの場所がわからないという実態である。ピアノの指導ができる講義は、1年次に前期15回、後期15回で年間30回である。2年次も同じであり、2年間習っても60回という限られた授業の中で、ピアノを弾く力をつけていく必要がある。また、採用試験の課題は、弾き歌いが多い。正式伴奏や簡易伴奏で弾き歌いをする技能を体得する必要がある。しかし、取得単位の関係で、多くの学生は、1年前期の15回の講義しか取れない現状である。15回の講義で、簡単な伴奏ができるまでの力をつけることが求められる。そこで、短期間で確実にピアノを弾く技術を高める指導法の在り方を明らかにする。

ピアノの実技指導に関する学生の現状と課題

1 ピアノを習った経験者の実態

図1は、今までにピアノを習った経験の有無について、実態調査を行った結果である。まったくの初心者が63%、小学校の低学年までと答えた学生が24%であり、合わせて87%の学生が初心者または、初心者に近いという実態である。5年以上10年未満と答えた7%の学生も経験年数は長いですが、技能の習得は低いと答えている。10年以上と答えた6%の学生は、弾き歌いが十分できる技能を体得している。この結果から、ほとんどの学生が、「標準バイエルピアノ教則本」を使って指導をする必要があることが明らかになった。



図1 ピアノを習った経験の有無（木原作成）

2 将来の職業についての実態把握

図2は、将来の職業について希望を調査した結果である。小学校の指導者を希望する学生が57%、幼保の指導者を希望する学生が43%で、小学校の指導者を希望する学生が多いことが伺える。

また、図1のピアノの経験者で、5年以上10年未満と10年以上を合わせた13%の内、78%の学生が幼保の指導者になることを希望している。小学校よりも幼保の指導者を希望している学生の方が、ピアノを弾く力を必要であると考えていることが伺える。

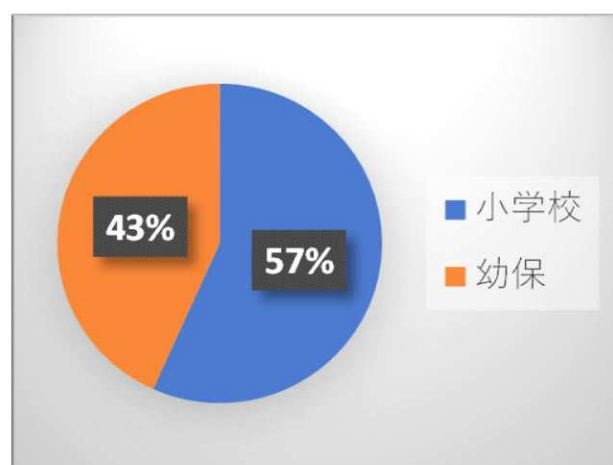


図2 将来の職業（木原作成）

文献研究

音楽教育家であったコダーイ・ゾルターンは、音楽教育の基本的理念を、次のように述べている。「ソルフェージュ教育の重視：すべての人々が、音楽の読み書きができるように、音楽上の文盲をなくさねばならない。一般学校教育の重視：(中略)音楽文化への道とは、学校の授業を通して、音楽の読み書きを一般化することである。」¹⁾

また、エミール・ジャック＝ダルクローズは、音楽表現について次のように述べている。「子どもの音楽表現的な能力は、子ども自身に生来的に拍子感としてリズムの要素をもち、その根源であるリズムを基本とした教育によって、幼児に音楽的感觉を目覚めさせ、それを身体的に発達させていく。」²⁾

小原光一は、読譜について、次のように述べている。「読譜そのものは、音を記号として記録したものであり、読譜によって記号としての音に思いや願いがこめられて表現され、そこに生きた音楽が生まれるのである。(中略)また表現するなかで無理なく自然に読譜能力が育っていくような指導を常に工夫していかなければならない。」³⁾

柿崎次子は、楽器を演奏するにあたり、「メロディーを演奏するためには、他の音やテンポを聞き取りながら、楽譜を見て、指を動かし、タイミングよく息つぎをするなど、多くの課題を同時進行で行わなければなりません。これはとても高度な行為機能を必要としますし、集中力も必要です。(略)複数の課題を同時進行で行うのに必要な能力を『注意の分割』と言います。」⁴⁾と述べている。

初心者にはピアノを弾く技能を身に付けるには、音楽上の文盲をなくすことが求められる。しかし、読譜力をつけることにウエイトをおくと音楽表現の楽しさを損なう可能性がある。ピアノを弾くためには、読譜だけでなく、多くの課題を同時進行で行う必要がある。初心者は今まであまり動かしたことの無い筋肉を使うことに慣れるにも一定の時間がかかる。そこで、拍子感としてのリズムを感じ取らせ、メロディーを口ずさみ、音高の動きを見とる楽譜の見方に慣れさせながら、読譜力をつけていく。そして、技能を高める過程で、「楽しさ」を感じられる指導法の工夫をしていく。

研究の方法

一部対面、一部ZOOMを使ったオンラインによる音楽技術(基礎)の講義で、紙鍵盤を使用してピアノを弾く技能を高めるために、次のような研究仮説と手だてを考え取り組むこととした。

1 研究仮説

オンラインによる講義や自宅の練習で、次の2点に留意して、指導者やYouTubeの演奏に合わせた練習をすれば、紙鍵盤でもピアノを弾く技能が高まり、ピアノを弾くことへの興味・関心が高まるであろう。

- (1) 指番号を意識して楽譜を見る。
- (2) 楽譜の上段(右手)と下段(左手)を縦に見て、両手で同時に弾く。

2 検証の視点と方法

- (1) 視点1 指番号を意識して楽譜を見て弾いたか。(レポート)
- (2) 視点2 楽譜の上段(右手)と下段(左手)を縦に見て、両手で同時に弾いたか。
(教師評価・自己評価)
- (3) 視点3 オンラインの授業で、YouTubeを活用したか。(事後アンケート)
- (4) 視点4 オンラインの授業でピアノを弾く技能が高まったか。
(シラバスの進捗表・事後アンケート)
- (5) 視点5 ピアノを弾くことへの興味・関心が高まったか。
(事後アンケート・レポート)

研究の実践と分析・考察

1 指番号を意識して楽譜を見て弾いたか

中地雅之は、鍵盤楽器の演奏について、次のように述べている。「鍵盤楽器演奏には、指番号の理解、鍵盤と音名の理解がまず必要となる。(中略)鍵盤と音名の理解には、黒鍵の二つと三つのグループの識別が前提条件となる。黒鍵から白鍵の音名は判別され、黒鍵を隠すと白鍵の音名は識別できない。」⁵⁾また、今泉明美・有村さやかは、指番号の設定

で、「指番号の設定は、なめらかな曲を演奏していく上でとても大切な要素です。練習の最初に指番号を設定しておくことでミスタッチも予防できて、楽曲のきれいな流れも表現できます。」⁶⁾と述べている。ピアノを弾

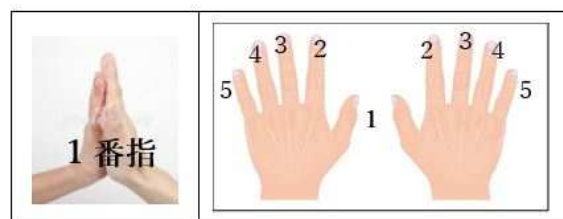


図3 指番号

くために、指番号を設定する意味を理解させる必要がある。

ピアノを初めて弾く学生には、図3のような指番号から指導していく。両手を合わせて、手前の親指から1番、2番、3番と数えて小指が5番になる。両手を合わせた指番号は、簡単に覚えるが、鍵盤の上に両手を開いておくと、指番号が混乱してしまう学生が多い。また、「階名が読めない」、「ドの位置がわからない」という学生も多くいる。

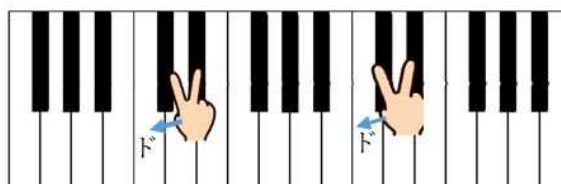


図4 ドの位置

図4は、初心者に指導する「ド」の位置の見つけ方である。まず、右手でチョコキをして、黒鍵が二つある上にチョコキをのせる。次に親指を軽く開いたところがドとなることを指導する。ピアノの鍵盤上の「ド」の音を探させる。チョコキで「ド」が7カ所あることを見つけさせる（実際には8カ所）。「ハ」の位置は、ピアノの中心に座り、下第一線の「ド」の位置であることを指導する。臍が一番近いところの「ド」の位置と指導する方が学生は、インプットしやすい。音の高さと楽譜を結びつける指導の第一歩である。初心者は、何歳であろうともピアノを弾くにあたっては、基礎から指導する必要がある。第1回の授業で、指番号と楽譜の見方を丁寧に指導し、実際に練習曲を両手で弾く。音符が読めなくても指番号を見れば弾けることを体感する。



資料1と資料2は、初心者の男子学生AとBの振り返りレポートである。ピアノを弾くことに苦手意識が強かった学生である。階名を読まなければならないという思い込みが強く、なかなか指番号を意識的に見ていなかったが、意識して見ると簡単に弾けることがわかったことを述べている。

資料1 初心者男子学生 A

ピアノの指番号を、しっかり楽譜に書くことが大事だと改めて理解できた。指番号を書かないで、音符を見てどの音か考えて弾くより、非常に効率が良いことを学んだ。(中略)あとは、指番号を声に出しながら弾いていくと確実な力がつくことを学んだ。今からは感覚で慣れるまでやるのではなく、指番号を書いた上でピアノ練習をすると決めた。

資料2 初心者男子学生 B

指番号を書くことによって、本当に弾きやすくなった。これまでは、指番号で弾いていたけれど感覚で指番号を覚えていたというもある。(中略)実際に指番号を書いて、番号を言いながら弾くと脳が勝手に反応してとても弾きやすかった。目で見て口に出しながら演奏することはとても大切だと実感した。紙鍵盤でしか練習できないけれど、自分の工夫や意識でレベルの高い練習にすることができる。

授業後のレポートでは、初心者 52 名のうち、50 名が指番号を見て弾くと練習時間が短縮できたと答えている。

2 楽譜の上段(右手)と下段(左手)を縦に見て、両手で同時に弾いたか

(1) 第1回の授業

初回の授業は、オンラインでは徹底した指導ができにくいため、対面授業が許可される6月の中旬まで待って行った。他の講義はすべてオンラインで実施されており、新入生は、大学で初めての対面授業となった。

個別に指番号、ドの位置の見分け方、階名の読み方から指導していく。次にテキストの1番、3番、4番、8番を両手で弾く指導をする。ある程度弾けるようになったら、連弾で弾く。どの学生も初めて両手で弾けるようになったことに満足する。そして、連弾で弾くと一段と上手に弾けたと思いきや感嘆の声を上げる。ピアノを弾くことに苦手意識をもっている学生に対して、意欲を喚起させるためには、欠かせない指導であると考えている。

(2) 指番号と楽譜の上下の読み取りに慣れる

図5は、初期段階における練習曲、バイエルの4番⁷⁾である。上段が右手、下段が左手で弾くことを指導する。いきなり両手で弾くことが難しいと思う学生が多い。右手の1番指で二点八の「ド」、左手5番指で一点八の「ド」を同時に弾くことを指導する。音符が上下でずれることなく書かれていることに注目させる。そして、拍を体の一部でとったり、右手の指番号を口ずさんだりしながら、ゆっくり弾いていく指導を繰り返し行った。階名を読まなければならないという概念にとらわれ、階名を覚えて鍵盤ばかり見て弾こうとする学生が多い。初期の段階は、階名を読むことより、音の高低の進行を見る力をつけることが、指を動かすことに連動していくと考える。



図5 バイエル4番

小学校頃に少しピアノを習った経験のある学生ほど、階名を読みたがり、片手ずつの練習をすることにこだわる。指を動かし辛い部分に関しては、片手ずつの練習が必要である。しかし、初期の段階では、動機単位で楽譜を上下に見て、両手で同時に弾く練習をする方が、効率よく曲を弾く力が付くと考える。理由は、片手ずつ練習をしても、最終的には楽譜の上下の音符の動きに合わせて同時に弾かなければならないからである。また、採用試験等で、弾き歌いをする場合、歌詞を見る必要があるため、楽譜を上下に見る力を付けておく必要がある。

楽譜を上下に見て、指番号を口ずさみながら練習することに対する反応として、初心者男子CとDは次の資料3と4のように述べている。

資料3 初心者男子学生C

61番の難しいところは楽譜をしっかりと見て変化に気付かなければならないところです。(中略)楽譜をしっかりと見る癖が少すついたように思う。また、リズムをとるのがとても難しかった。だから口に出して「1と2と3と4と」と言いながら弾くことを意識しました。右手と左手の違いをどれだけ注意して弾くかがポイントになる。(中略)右手と左手の両方の楽譜を交互に見ていく練習を繰り返していくことが大事だと感じた。

資料4 初心者男子学生D

(略)以前したときにできなかったところが今回はしっかりできるようになっていました。それは以前言われた音楽の楽譜の見方のおかげだと思います。また、音楽の音源をしっかりと聞いていたので頭にそのリズムや流れがあったので弾きやすかったと思います。それらは、上と下の段の弾く音符の見方が一番参考になり練習の質が高まったと思います。

どちらの学生も初めてピアノを習っている学生である。一定の期間は、自分のやりやすい練習方法で行ってきたが、曲の難易度が上がるにつれ、楽譜を上下に見て両手を合わせて弾くことが効率のよい練習であることを述べている。練習曲の進度が速い学生ほど、楽譜を縦

に見て弾いていることが指導を通して伺える。シラバス通りに練習曲が進んでいる学生が多いことから、楽譜を縦に見て、両手で同時に弾く方法が有効であることが明らかになった。

3 オンラインの授業で、YouTube を活用したか

基本的な指導を進めていくこと5回が終わったところで、学内でコロナの感染者が出たため、対面授業が中止になった。以後、ZOOMによるオンラインで授業を進めていくことになった。

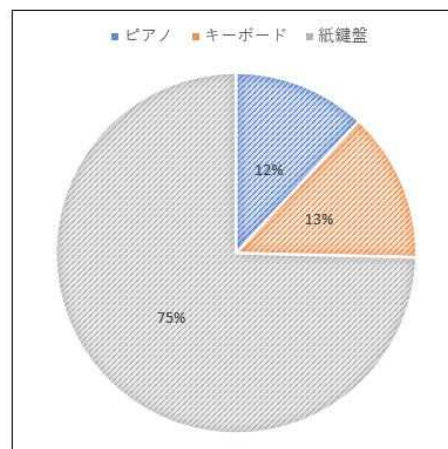


図6 楽器の保有率（木原作成）

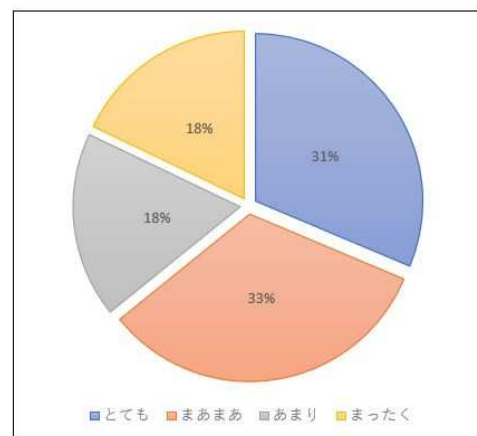
(1) 紙鍵盤の学生に双方向同時型で指導する

各クラス20人から21人のピアノの指導をオンラインですることになり、学生宅の音源の有無を改めて調べることになる。「ピアノがある」と答えた学生が12%、「キーボードがある」と答えた学生が13%いることがわかる。75%の学生は、音源となる楽器がなく、テキストについている紙鍵盤で練習することになる。「キーボードがある」と答えた学生の中でも、アパート住まいであり、音を出すことができないので、授業は紙鍵盤で弾くことになる。90分の授業の形態として、公開レッスン方式を取り入れた。以後、具体的な指導を述べていく。「標準バイエルピアノ教則本」のテキストを使用し、シラバスに記載している練習番号に沿って、個に応じた進度で指導していく。初心者が多いため、進度が同じ学生が複数いるので、練習番号の低い番号を練習している学生たちから、指導していくことにした。すでに終わった学生は、復習を兼ねて練習することと、将来指導者になる自覚を持たせるため、指導者の指導法も研究するように促した。同じ練習番号を弾いている学生達（2～4人）に指導することを伝え、指導者が実際に弾く速さに合わせて紙鍵盤で弾かせる。その後、個別にできの有无を確認する。学生は、自己評価で答える。できなかったという学生に対しては、どこが難しかったのかを聞き、アドバイスをする。もう一度全員で弾き、結果を聞く。2回目に「できた」と答えた学生は、合格にし、「もう少し」と答えた学生は、次週までもう一度練習することにする。次回の課題曲を与え、ポイントとなるところを説明しておく。そして、次の課題曲に進んでいる学生の指導をする。内容は、同じ進め方で、徐々に難易度が高くなるように指導していった。経験者は、かなり進度が進んでいるため、初心者は、高度な練習の仕方を聞くことになる。また、自宅に音源のある学生は、実際に弾いてもらい、指導をしていった。

紙鍵盤の学生は、指の動かし方を練習することが主な学習内容になるので、自分が弾いている音を聞くことができないという課題がある。学生自身も実際の音がわからないので、授業で指導者が弾く音を聴いて、曲のイメージをつかんでいくことになる。授業そのものは、それでも弾けているかどうかで、進度を上げていくことができる。しかし、音源がない中での練習は、魅力に欠ける。そのため、YouTube を使った練習方法をアドバイスした。YouTube は、テンポで演奏しているため、速度が速い。自分が弾ける速度に落として、YouTube から流れてくる音に合わせて指を動かし、課題曲を弾く練習をするように勧めた。そして、授業の振り返りを、A4 の用紙 1 枚程度のレポートに書かせ、毎回提出させた。次回の授業までに、コメントを返し、つまずきに応じる指導を行った。

(2) YouTube の活用度

図 7 は、自宅の練習で YouTube をどの程度活用しているかについて調べた結果である。「とても活用した」と答えた学生が 31%、「まあまあ活用した」と答えた学生が 33% いる。「とても」と「まあまあ」を合わせると、64% の学生が肯定的に答えている。活用の仕方を次のように述べている。「曲想がわからないので、まず聴いてイメージをつかむ」、「リズムや速さを参考にし



た。」「タッチの仕方や強弱のつけ方を参考にした。」「自分の弾けるテンポにして、音を聴きながら練習したので、ピアノを弾いている感じがした。」「朝から YouTube の演奏を聴くと練習したくなり、練習量が増えた。」等の理由を挙げている。また、「あまり活用しなかった」と答えた学生が 18%、「まったく活用しなかった」と答えた学生が 18% いる。否定的に答えた学生の理由として、「あまり活用しなかった」と答えた理由は、「テンポが速いのでついて弾くことができない。」「楽譜をみるのがやっとなので、聴きながら練習するのが難しい。」等と答えている。「まったく活用しなかった」と答えた 18% の学生は、「YouTube の使い方がわからない。」「まったく知らなかった。」と答えている。初心者で難易度の低い曲を弾いている学生の多くが、否定的に答えている。練習の仕方も、両手で同時に弾くのではなく、片手ずつ練習している学生に、活用していない傾向が見られた。この結果から、YouTube を活用することで、練習の効果が上がったことが明らかになった。

4 オンラインの授業でピアノを弾く技能が高まったか

(1) 指導のテキストと進度表

表 1 練習曲と授業形態

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1.3.4.8	12・13	15・18	26・29	36・43	44・45	49	52	58	60	61	ハ長調	65	66	まとめ
対面	対面	対面	対面	対面	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	オンライン	対面	対面	対面	レポート

表 1 は、シラバスに記載している練習曲の進度と学習形態である。「標準バイエルピアノ教則本」のテキストを使用し、シラバスに記載している練習番号に沿って、個に応じた指導をしていく。オンラインで行う授業になった 6 回目の授業の頃は、対面授業で指番号と楽譜を縦に見て、両手で同時に弾くことに慣れつつあった。進度の速い学生は 61 番に進んでいた。この曲は、付点四分音符と八分音符のリズムのため、1 拍目は同時に弾くが、2 拍目は裏拍子が右手になり、学生にとっては、難易度が高い曲である。拍の数を「1 と 2 と 3 と 4 と」と数え、「2 と」の「と」で右手の 8 分音符を弾かなければならないので、オンラインの授業で学生が理解して弾くことは難しい曲である。授業後のレポートに、「リズムの取り方が分からない時に、YouTube を活用するとイメージができ、練習もスムーズにできた。」と書いている学生が多かった。メディアを活用して、楽譜の見方がわかるようになっていることが伺える。

(2) 練習曲の進捗状況

図 8 は、第 15 回の授業終了時に到達した曲の人数を示している。青が初心者、オレンジが 5 年未満、グレーが 5 年以上、10 年未満、黄色が 10 年以上の経験年数を示している。シラバスの目標は、60 番代であり、初心者 52 名の内、目標に到達した学生が 64% で

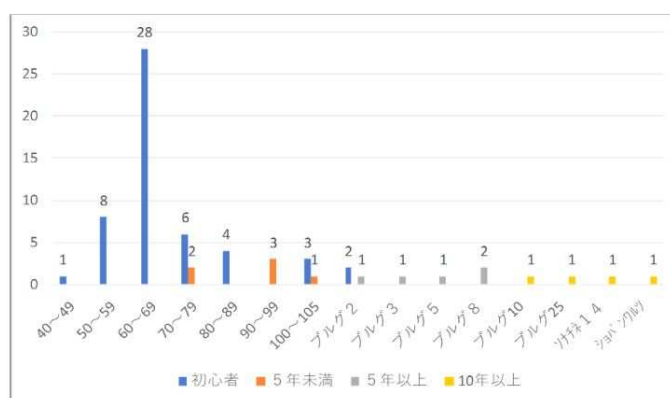


図 8 練習曲の進捗状況 (木原作成)

ある。到達した学生の内、29%は、目標よりも進んでいる。また、60 番代に到達しなかった 17%の学生の内、15%が 50 番代である。40 番代の 2%の学生は、体調が悪く欠席しがちであ

ったことが進度の遅れた原因と思われる。一部対面、一部オンラインという授業であっても、ピアノを弾く技能が高まったと考える。

(3) ピアノを弾く技能に対する事後アンケートの結果

図9は、「ピアノを弾く力がついたと思うか」について、授業後にアンケート調査を行った結果である。「とても」と答えた学生が51%、「まあまあ」と答えた学生が45%おり、「とても」、「まあまあ」を肯定的に捉えると、96%の学生が技能の高まりを感じている。否定的に答えた4%の学生の理由は、ピアノで練習ができなかったことで、練習ができにくかったことを挙げている。

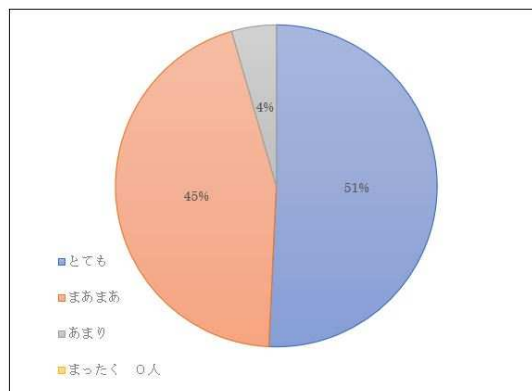


図9 技能の高まり(木原作成)

(4) オンラインの授業における効果

図10は、オンラインによる授業の効果について、事後調査をした結果である。「とても」と答えた学生が21%、「まあまあ」と答えた学生が55%いる。「とても」、「まあまあ」を肯定的に捉えると、76%の学生が参考になったと答えている。「あまり」と答えた学生が21%、「まったく」と答えた学生が3%いる。「まったく」と答えた学生は、難易度が高い曲を弾いており、限られた短い時間で、細かなところの指導がしてもらえなかったことに物足りなさを感じたことを書いている。「あまり」と答えた21%の学生の理由は、対面でないと細かな指導が受けられず、紙鍵盤であるため、正しく弾けているのかどうなのか自信がないことを挙げている。実技の指導は、対面で個に応じた指導をすることが望ましいことは、明らかである。しかし、コロナ禍の今日で、授業を次年度に伸ばすことも考えるが、外出できない今日だからこそ、練習をする時間の確保と、他の講義の合間で実技の学習をすることは、意義があると思う。

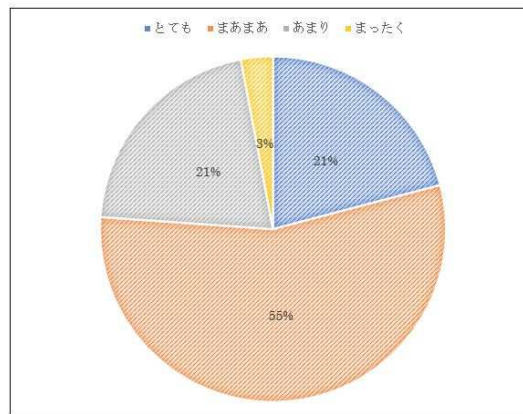


図10 オンライン授業の効果(木原作成)

5 ピアノを弾くことへの興味・関心が高まったか

図 11 は、「この授業を受けてピアノを弾くことへの興味・関心が高まったか」について事後アンケートをした結果である。「とても」と答えた学生が 78%、「まあまあ」と答えた学生が 21%いる。「とても」、「まあまあ」を肯定的に捉えると 99%の学生が、ピアノを弾くことに対して興味・関心を高めたことがわかる。「あまり」と答えた 1%の学生は、実際のピアノで練習できなかったことで、自信がないことを述べている。一部対面の授業はできたが、練習室を使用できず、授業に来た時の講義室でのみピアノでは、満足する練習にならなかったことが原因と考える。

図 12 は、「この授業を受けてよかったか」について、事後アンケート調査した結果である。「とても」と答えた学生が 91%、「まあまあ」と答えた学生が 9%いる。「とても」、「まあまあ」を肯定的に捉えると、全員が満足していることが伺える。授業後のレポートには、次のように書いている。「ピアノについては、苦手意識があり、今まで習うことを避けてきた。今回の授業を受けて、やればやるほど上達していくことがわかり、こんなに面白いものだと思わなかった。もう少し早くから習えばよかったと思ってい

る。」また、「練習していくうちにどんどん弾けるようになったので、紙鍵盤では満足できないので、キーボードを買った。」という学生が 4 名いた。「他の講義は、オンラインの授業とレポート提出ばかりで、ストレスがたまっていたが、ピアノの練習をすることで、気分転換ができた。」「両手でピアノを弾くことは、不可能だと思っていたが、自分も弾くことができることがわかり、練習が楽しくなってきた。」等を述べている。今後も合間を見つけて、ピアノを弾いて楽しみたいという意見が多く見られた。以上の結果から、この研究仮説が有効であると言える。

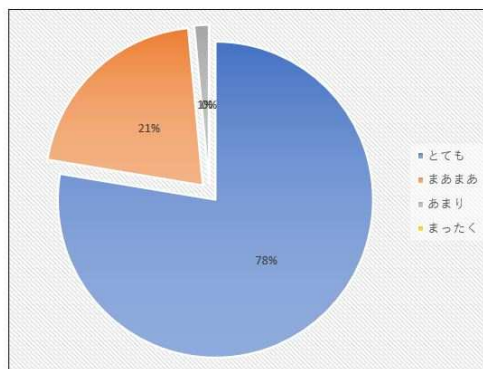


図 11 興味・関心が高まったか
(木原作成)

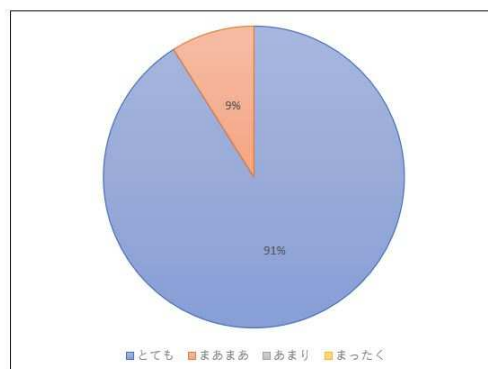


図 12 授業を受けてよかったか
(木原作成)

研究の成果と課題

初心者を対象に一部対面、一部オンラインの授業を行った結果、シラバスに示した内容で授業を終えることができ、基本の技能を習得させることができた。ピアノで練習ができなかったという点が例年の授業との相違点である。成果として、オンラインによる授業は、次の課題曲を聴くことができ、練習の参考にできる。課題曲が違っていても、同じ注意を受けるため、個々の課題を明らかにすることができる。他の人の指導が聞けるため、指導法を学ぶことができる。YouTubeを使っただけの練習は、ピアノを弾いている感覚を味わうことができる等が挙げられる。以上のことから、ピアノを弾くことに苦手意識をもっていた学生が、興味・関心を高め、ピアノを弾くことに対する意欲の喚起を図ることができた。

今後の課題として、紙鍵盤は、実際の音がでないため、ミスタッチをしていても見逃すことになる。強弱がつけにくく、細かな部分の弾き方の指導ができにくい。学生によっては、途中で電源が落ち、授業に入れなくなる時間があった。公開レッスン方式での授業は、他の人の指導を聞く時間が多く、個人の練習時間の確保ができにくい。意欲を喚起させるための言葉かけの時間が少なくなる等がある。鍵盤を使って、実際に指を動かしている状態を見て指導できる環境を整えることも課題となった。

おわりに

ZOOMを使ったオンラインの授業により、学生は自分の練習だけでなく、他の学生の進捗状況を把握することができ、参考にしたり、励みにしたりして技能を高めることができた。指導する側としては、音が返ってこない紙鍵盤を使って、ピアノの指導をしていくことで、技能を高めることができるかどうか半信半疑であった。本来なら、読譜力をつけるために、楽譜を見て自力で練習曲を弾くことが望ましい。しかし、音源のない中で、リズムをとって練習することは、初心者には厳しい現実である。YouTubeを個人の練習の中で有効に活用していくことも今後の練習方法の一つである。オンラインでのピアノ指導ができたことに感謝する。

引用及び参考文献

- 1)井口 太(2019) 「最新・幼児の音楽教育『幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導』」朝日出版社 P.63
- 2)井口 太(2019) 「最新・幼児の音楽教育『幼児教育教員・保育士養成のための音楽的表現の指導』」朝日出版社 P.63
- 3)小原光一・山本文茂(1997)「音楽教育論 子供・音楽・授業・教師」教育芸術者 P.198
- 4)柿崎次子(2019)「感覚統合を生かして子どもを伸ばす!『音楽療法』」苦手に寄り添う楽しい音楽活動」明治図書 P.14
- 5)中地雅之(2017)「最新 初等科音楽教育法[改訂版]小学校教員養成課程用」音楽之友社 P.68
- 6)今泉明美・有村さやか(2019)「子どものための音楽技術 感性と実践力豊かな保育者へ」萌文書林 P.92
- 7)「標準バイエルピアノ教則本 併用曲付」全音楽譜出版社 P.17